昭和35年３月14日　第三種郵便物承認　令和３年１月１日発行（毎月１回１日発行）通巻857号

禪の友

—Zen no Tomo—

1
January 2021

ご本山だより
大本山永平寺【令和三年睦月】

永平寺のお正月は、無事に新年を迎えられたことに感謝し、新たな年を禍なく過ごせるようご祈祷などを修行します。また、歳朝人事行礼という古式に則った新年の挨拶が交わされます。

一般のご家庭でも初詣に行かれたり、おせち料理を頂いたり、ご家族や友人など親しい方々と睦あわれることでしょう。このような習慣があることから一月を睦月というようになったそうです。

お正月の由来について調べてみますと、「ご先祖さまが歳神さまとなって帰ってこられ、各家に幸福をもたらす」ということが様々な文献に出てきます。この歳神さまの最も古い文献は『古事記』のようですが、古より稲作を中心に生きてきた日本人が五穀豊穣や健康を祈り感謝を現す行事であることが分かります。故に、年末には大掃除をして家を浄め、神さまの滞在先であることを表す「門松」を設け、神聖な場所であることを示す「しめ縄」を飾ります。「鏡餅」は歳神さまへのお供え物です。こうして、日本人は古来感謝と祈りを形に現したのです。地域によっては、お盆のように、お檀家さまの各家を年始参りされる寺院もあり、ご先祖さまが帰ってこられるという所以でしょう。

戦国時代の大名で豪傑といわれた毛利元就公は、「一年の計は春にあり、一月の計は朔にあり、一日の計は鶏鳴にあり」と語られた記録が残っています。一年、一月、一日、それぞれ最初が大切であるとの戒めです。諸行無常のこの世において、時はあっと言う間に過ぎてしまいます。一年を虚しく過ごしてしまうかもしれません。自らの命に保証がない、戦国武将らしい戒めです。

このことを道元禅師さまは「光陰は矢よりも迅なり、身命は露よりも脆し（刻々と過ぎ行く時は矢よりも迅く、私たちの一生は草花に宿る朝露よりも脆いのだ）」とお示しです。光陰を虚しく度ることなく、今を大切に生きる実践として、お正月は大切な行事であると改めて感じます。

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより

大本山總持寺【新しい年を迎えて】

大本山總持寺
☎〇四五・五八一・六〇二一

明けましておめでとうございます。新春を迎え、皆さまのご多幸と社会の安寧、特に一日も早い新型コロナウイルスの終息をお祈り申し上げます。

總持寺の新年は大梵鐘の撞き初めから始まり、仏殿での祝祷諷経、大祖堂での禅師さま御親修の元朝大祈祷法要、引き続き明け方近くまで初詣祈祷が行われます。

初詣はコロナ禍により様々な制限を伴っての内容となりますが、三が日の祈祷や七日までの特別大祈祷は従来どおり行います。

正月行持が一段落すると、冬安居（一〇〇日間の集中修行）が解制（終了）します。首座和尚を中心に冬の長い修行を成し遂げた雲水の明るい表情が春の訪れと重なり印象的です。

さて、本年は總持寺が開創されてから七〇〇年という大きな節目の年です。開創は元亨元（一三二一）年、ご開山瑩山禅師さまが能登の永光寺で観音さまの瑞夢を感じ、同じ頃に總持寺の前身となる諸岳寺の定賢律師も観音さまの霊夢を観られたことに始まります。

直後にお二人は羯鼓林という場所で出会い、譲られた諸岳寺を總持寺と改められました。それから七〇〇年の嘉辰を迎え、九月に祖院での御征忌会で慶讃法要が行われます。

また祖院では平成十九年発生の「能登半島地震」により甚大な被害を受けましたが、お蔭さまで全国のご寺院さま・檀信徒皆さまのお力により耐震保存復興修理工事が完了し、落慶式が四月六日に行われます。

曹洞俳壇

選・坊城俊樹

赤カンナ檀一雄食む能古うどん

福岡県　進藤　久乃

評　『家宅の人』で有名な檀一雄は、そのとおりの波瀾万丈の人生を送った。私もかつて彼の晩年の居である能古島にも行き、旧居を覗いたりした。うどんは食べなかったが、そこの庭に真っ赤なカンナが咲いていたらさぞかし似合っていただろうと思う。

大鳴子結界なせり熊野道

山口県　粟屋　邦夫

評　熊野詣で有名な中辺路などは修験道としてことに有名である。その大渓谷に大鳴子がかかっているのである。その音色もまた修験の異界の世界と、一般の世界を隔てるかのように鳴っている。壮大な景色と同じような立派な句柄に賛辞を送りたい。

◆虫の闇深し金鈴いよよ冴え　大分県　久恒　大輔

◆秋風や古りし魚拓の真子鰈　埼玉県　長澤　きよみ

◆まんじゅしゃげ男の子は棒を持ちたがる　静岡県　小泉　八千代

◆狭霧抜け参道ゆけば仁王門　長野県　塚田　澄薫

◆湖底より生まれし大地稲実る　秋田県　小田嶌　恭葉

◆秋暮れて古い行李を懐かしむ　秋田県　田村　惠美子

◆しづけさやあしおとに雪ふりつもる　山形県　小林　加理枝

◆子らの声転がりながら秋日暮　大阪府　有川　澄子

◆何時となく鞄の中の木の実かな　北海道　中西　千晶

◆司馬さんと街道をゆく秋燈火　滋賀県　三田　和子

選者吟

子は二歳母は二十歳（はたち）の墓誌へ秋

俊樹

作句小見　秋の一日に俳句の吟行をしていて、とある墓の墓誌を見たらこのようなことが彫られていた。一瞬にしてこの二人の運命に気がついた。同じ命日なのである。交通事故かあるいは何か不幸な出来事で命を落としたのではないかと。あまりにも若すぎる。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

落つる陽を抱へこむやうまるまりて大きな蜂なる骸は地に

熊本県　島田 佳可

評 「大き蜂」とは言うものの小さな虫の死を、地平線に落ちる太陽を抱くと描くことで荘厳なものにする。そしてその死は大地に受け止められ永遠の眠りにつく。命の連鎖を思わせながら、背後に静謐な安らぎを感じさせる一首である。

もやもやを頭の中で変換し平仮名多き一首詠みたり

青森県　中田 瑞穂

評 誰しも歌を詠もうとするときの脳内は、ここで詠われているような状況だろう。パソコンやスマホに文字化して詠うことが普通になった時代の様子を「変換」の語が端的に示す。

◆難解な医学用語は分らねど胸なでおろす医師の一言
鳥取県　眞山 博充

◆扱き終へし後の瑞々しき麦藁で蛍御殿を編みし日のあり
三重県　西村 廣視

◆兄の家の柴犬は名前を「なつ」といふそを知りてより「一葉」と呼ぶ
福岡県　三吉 誠

◆朝陽に鳶高く舞ふ秋の空夕べ音なく雨の降り出す
静岡県　杉原 民子

◆雨降れば糖度落ちると友の言ふ雫のうかぶ無花果捥ぎて
山口県　濱田 道子

◆装ふてふ語の美しき栗ご飯母の遠忌の親族に饗せり
秋田県　小田嶌 恭葉

◆夕焼けは明日に繋がる空の色けふ振り返る大きな半紙
岐阜県　後藤 進

◆我に和し月の砂漠を口ずさむ夫と帰りぬ星空の道
鳥取県　東 香

◆四六時中雀威しのガス銃が響きわたりて暑き夏の夜
鳥取県　山本 浩一

◆法師蟬道元忌の経に唱和するまどいっぱいに百日紅の白
愛知県　重野 宏美

選者詠

奥津城につるくさのつる巻き戻す父母在りし時へ時へと

ちづ

作歌小見 西村さんの「蛍御殿」とは何と優雅な虫籠の表現でしょう。蛍を入れた藁の隙間から明滅する光が漏れるのを楽しむ昔の子どもの知恵。三吉さんの歌は樋口一葉の本名が「なつ」ということからの発想。知的センスがひかります。

【作品お待ちしています】ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々にP27　掲載の送付先までお送りください。